

Title	バルザック「ルイ・ランベール」について
Sub Title	Balzac's Louis Lambert
Author	高山, 鐵男(Takayama, Tetsuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1958
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.8, (1958. 10) ,p.94- 109
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00080001-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バルザック「ルイ・ランベール」について

高 山 鐵 男

「ルイ・ランベール」(Louis Lambert)の制作年代はほぼ一八三二年より三五年にわたっており、したがってバルザックの知的形成の最後の時期に相應している。「ルイ・ランベール」がバルザック研究上、極めて重要な作品であることはバルザック研究家の多くが認めるところであつて贅言を要しない。書簡に於ても作品に於ても、自己の内面を語るに極めて吝かであつたこの天才の内的精神を探る上に於て、「ルイ・ランベール」は殆んど唯一の手がかりであるときえ言ひ得る。併しながら、この作品とバルザックの内的精神との關係、また結局は同じことであるが、「ルイ・ランベール」制作にあつてのバルザックの意圖、及び、一八三二年〜三五年と
いうバルザックにとつて決定的な意味を持つていたと思われる時期に、「ルイ・ランベール」の如き作品が書かれねばならなかつた必然性、これらの事は必ずしも自明ではない。以下こうした問題について簡単に卑見を述べてみたい。

バルザックが哲學や宗教に對して主要な關心を注いだ時期、いわばバルザックの哲學的時代ともいふべき時代はバルザックの生涯に二度認められてゐる。その最初のものは一八一八年より二一年に至る期間であり、この時期に書かれた「哲學的覺え書」「ステニー」「ファルテュルヌ」等の作品は大體に於て唯物論的乃至は感覺主義的傾向を示してゐる。ステニーの主人公は「人間は物質の一斷片に過ぎない」と語るのであり、「ファルテュルヌ」に於ては神の概念は自然や偶然という概念によつて代置されてゐる。要するにこれら初期の作品に於て見る限り、バルザックは明らかに十八世紀唯物論の壓倒的影響下にあつた。他方、バルザックの第二の哲學的時代は一八三〇年代のはじめであつて、この時期の哲學的作品は「哲學研究」に一括されて、今日「人間喜劇」の一部となつてゐる。「ルイ・ランベール」も又、言うまでもなくこの「哲學研究」におさめられてゐる作品の一つである。これら「哲學研究」の作品群には初期の哲學的作品とは反對に神祕主義的色彩が濃厚に見られ、哲學的作品のこれらの二つの群の間には斷層が存在するのであつて、第一の哲學的時代と第二の哲學的時代とを分つ十年間のうちにバルザックの精神にはある轉機が訪れたのではないか、という印象が與えられるのである。そしてバルザックの哲學は當初の唯物論的傾向から神祕主義的傾向へと移行したかのように思われるのである。若しこのような印象が正しいとすれば、バルザックの知的形成は、唯物論から神祕主義へという單純な圖式で要約されることになる。このような單純な發展形式をもつてバルザックの精神を理解することは容易であり、また誘惑的でさえある。併し、このような圖式は完全に無意味であることをやがてわれわれは認めざるを得ないのである。何故なら、第一の哲學的時代の直後に、すでにバルザックは短い斷片ではあるが、「ファルテュルヌ」セラフィータ⁽⁴⁾の如き、神祕的雰圍氣の濃厚な作品を残し、この作品は「ステニー」や「ファルテュルヌ」と奇妙な對照をなしているからである。のみならず、第二の哲學的時代に書かれた作品のうちに於てさえ、もつとも唯心論的且神祕主義的言辭とならんで、唯物論的傾向が隨所にうかがわれるからである。こうして、バルザックの青年期に於ける思想の發展をたどる時、そこに見られるものは完全なる混亂と矛盾である。バルザックの哲學は唯物論から神祕主義へと移行していつたのではなく、すでに一八二〇年代のバルザックのうちに唯物論と神祕主義という二つの相反する思想がともに存在してゐたのであり、この二元論的對立は第二の哲學的時代にあつても尙解決される事なく、バルザックの精神を全く相反する二つの極へと互に牽引しあつていたので

ある。

「ルイ・ランベール」は一八三二年六月に書き始められた。バルザックはそれまでにすでに「みみずく黨」や「あら皮」の如き作品を書き終つていたとは言え、未だ如何なる決定的作品をも書いてはいなかつた。青春期の摸索の時代にまさきに終ろうとしていた彼は、「ウージェニー・グラランデ」「田舎醫者」「父ゴリオ」等の傑作を生むべき偉大な創造的時代の直前にいる事を自ら豫感していたであらうか。いづれにしても、彼は「人間喜劇」へ至る困難な藝術家としての道を歩み始めるに際して、自らのうちにあつて對立する世界と存在についての二つの相反する觀念を綜合し、統一的なヴィジョンを己れのものとする必要を痛切に感じていたに相違ない。そして結論をさきに言うならば、「ルイ・ランベール」こそは、このような統一的な世界觀を求めて試みられた實驗に外ならず、「ルイ・ランベール」制作にあたつてのバルザックの異常な苦心と努力のうちには、單にすぐれた作品を完成しようとする小説家の技法上の努力だけでなく、世界を獨自の、統一的なヴィジョンによつて認識しようとする意識家の努力がうかがわれるのである。「ルイ・ランベール」を制作しつゝあつた時のバルザックの内心の動向については、彼の書簡は例によつて具體的な何物も語つてはいないが、併し、ゾルマ・カローに宛てた書簡の次のような一節は、この作品の制作がバルザックの精神にとつて極めて重要な意義を持ち、作品の制作がそのまま作者の知的探究と重なり合つていたことを感じさせる。

「新しい作品（筆者註「ルイ・ランベール」のこと）の各行は私にとつて一つの深淵でした。この作品にはわれわれの間だけの祕密がこめられています。⁽⁵⁾

「あなたはルイ・ランベールについて誇りを感じられる事でしょう。この作品をあなたに読んでさし上げた日から、幾時間も、幾日も、また幾晩もが、この作品のために費されました。この作品が、どれほどの努力を要したか、誰も知らないでしょう。⁽⁶⁾」

さて、右に述べたように「ルイ・ランベール」が、唯物論的傾向と神祕主義的傾向の對立をのりこえるために試みられた實驗であり、何よりも先ず作者の内的問題を解決すべく書かれた作品であつたとすれば、バルザックは如何にして問題を解決しようとしたか。

次に主人公ルイ・ランベールの思想的展開を分析しつつ、問題解決のためのバルザックの努力の跡をたどつてみよう。

ルイ・ランベールの思想的展開は、作者自身暗示しているように、三つの段階に分けられ得る。第一期は、ランベールの誕生から、「私」との出会いに到るまで、第二期は「私」との別離に到るまでのヴァンドーム中學時代、第三期はそれ以後の時代である。

第一期はルイ・ランベールの神祕主義的・唯心論的時代であるが、ここでは單に、彼がスエーデンボルグを始めとする神祕家たちの書に親しんでいることが示されているのみで、ランベールの思想の内容は暗示されるにとどまつて充分に展開されていない。ただ注目したいのは、ルイ・ランベールが神祕主義者として描かれている一方、「私」は唯物論者として登場しているということである。すなわち、「ルイ・ランベール」のこの部分に於てすでに、作者にとつて中心的課題であつたと思われる神祕主義と唯物論の對立は明らかにな形で提出され、バルザックは自らのうちにある二つの相對立する思想の極を二人の主人公の思想的對立のうちに表現したのであり、ルイ・ランベールも「私」もともに同じ程度に於て、作者の思想を分かち持つ分身なのである。さらに、ルイ・ランベールの神祕的傾向に對する否定の契機も又この部分のルイ・ランベールに示されている。この否定の契機とはすなわちルイ・ランベールの精神のあり方そのものに外ならない。ルイ・ランベールの精神とは要するに一切の行爲を認識と思考に還元しようとする精神であり、主體的な自己の能力を極限に迄いたらしむることによつて「絶対」を探究せんとするものなのだ。このような精神は、自己を宇宙的なるもの、超越的なるものへ没入せしめようとする神祕主義の本質に相反せざるを得ぬ。それ故、第一期のルイ・ランベールの神祕主義は二つの對立項、二つの否定の契機を持つと言えよう。即ち第一に語り手である「私」の唯物論であり、第二にルイ・ランベール自身の精神の存在様式である。このように自らの否定の契機を含むものとして、ルイ・ランベールの神祕主義を提出する事により、作者は白らうちにある思想上の對立を表現したのであり、同時にまた、このように提出される事によつて、この部分は第二期・第三期に展開される思想の劇の導入部となつていたのである。

ルイ・ランベールと「私」との邂逅に始まる第二期はルイ・ランベールの唯物論的時代であり、それ以前の神祕主義的傾向は「意志の哲學」によつてとつて代られる。「意志の哲學」とは人間の一切の精神活動の根源を意志に求め、しかもその意志を物質とみなす哲學である。意志は物質であるとともに力であつて、電氣的磁氣のように他に作用を及ぼし、物質の世界に滲透する事が出来る。要するに第二期のルイ・ランベールの哲學は精神現象を化學的な物質現象と同一視しようとする點に於て、十八世紀の唯物論者たち、乃至はその後継者であるイデオログたちの思想に相似た哲學であると言ひ得る。

併し、このような思想に到達したルイ・ランベールは、神祕主義的傾向から完全に離脱した精神として描かれていたのではない。むしろ、彼が現在到達した思想と、かつて彼を魅した思想との相剋に苦悶し、唯物論に向う分析的知性と、神祕主義におもむこうとする直觀的感性との矛盾に引きさかれた精神として描かれる。そこに見られるものは、いわば認識と夢想との分裂であり、それ故にこそ、ルイ・ランベールの主要な關心は認識と夢想との結合に、物質的なるものと精神的なるものとの連續性の發見に注がれるのだ。そして意志こそはルイ・ランベールの哲學に於て、物質と精神との結節點の役割を果すものに外ならないのである。ルイ・ランベールの唯物論は、より正確に言うならば、神祕主義的の唯物論的解釋とも言うべきものであつて、彼は中世的な魔術や、豫言や奇蹟を「物質の構成要素と思维の構成要素との間にある、ある種の親和力」⁽⁸⁾によつて説明しようとする。このようにルイ・ランベールは精神機能のみならず、超自然的な心靈現象をも物質である、意志によつて説明しようとし、そうする事によつて物質と思维の連續性を打ち立てようとするのであるが、このような試みは必然的に失敗せざるを得ない。何故なら、ランベールは精神現象や魔術的な心靈現象を物質である、意志によつて説明する際、この意志に非物理的な、又は超自然的な屬性を與えてしまつてゐるからである。したがつて、單に精神という言葉が意志という言葉に置き換えられたに過ぎず、如何にして意志が物質であると同時に、そのような精神的な、又超自然的な屬性を有し得るかということが説明されない限り、問題は依然として解決されておらず、物質と精神とは不連続なままなのである。そして、しかもこの失敗は作者バルザック自身がよく知るところであつたに相違ない。例えば次に引用する一節はそのことを充分に示してゐよう。

「當初に於ては純然たる唯心論者であつたランベールが、思维の物質性を認めるに至つたのは自然の勢いであつた。分析の示す事實

によつて打ちくだかれつつも、併し、彼の心情は未だスウェーデンボルグの天國に散る雲を懐しいものに思わせていた。しかも彼は統一、的で、緊密な、一氣に作りあげられた體系を生む力を未だ持つていなかった。そのために、私が粗描した彼の最初の思索の試みにはいくつかの矛盾が刻かれているのである。」(傍點筆者)

ところで、バルザックがここで暗示している統一的な體系は果して可能なのであるか。可能であるとすれば如何にして可能となるのであろうか。次にわれわれは第三期のルイ・ランベールを檢討してみなければならぬ。

ルイ・ランベールは「私」と別れたのち、ヴァンドーム中學を去つてパリに出、ついで伯父のもとに歸つて狂氣の人となつてしまふのであるが、この第三期のルイ・ランベールの思想は「ルイ・ランベール最後の思想」とよばれる總計三十七の斷片として残されている。前述したように第一期に於て神祕主義に出發し、第二期に於てはその神祕主義を唯物論的な觀點から説明しようとして失敗したルイ・ランベールの知的探究は、第三期に於てこそ、神祕主義と唯物論を綜合すべき統一的な世界觀を打ち立てるものでなければならぬ。第一等であつたし、事實バルザックはそのようなものとして、第三期のルイ・ランベールを描こうとしたのであつた。併し實際にわれわれがそこに見出すものは、一見支離滅裂としか見えぬ、奇妙な言葉の集合である。それはバルザックの言う「統一的で緊密な」體系からはほど遠い、單なる斷片の集合に過ぎないのであるが、しかしそれらの斷片を仔細に検討する時、そこにも尙われわれは、統一的な世界觀へ向おうとする思想の方向を明瞭に讀み取る事が出来る。では唯物論と神祕主義の矛盾を第三期のランベールは何によつて解決しようとしているのだろうか。私見によれば、斷片に示されたランベールの哲學は、この矛盾を運動の概念の導入によつて解決しようとしたもののように思われる。斷片に現れたランベールの哲學は第二期の意志の哲學に出發してさらに視野を擴大し、意志を生ぜしめるもの、換言すれば存在そのものの問題を對象にとり上げる。斷片Iに記されているところによれば、一切の存在はエーテル的實體の所産であり、このエーテル的實體が組織體の中で意志に變化するのである。ところで意志をエーテル的實體の所産としたのみでは第二期の「意志の哲學」に於ける「意志」がエーテル的實體に置き換えられたのみで、問題は一向に解決されていない。併し23番の斷片⁽⁹⁾

は「一切は運動によつてのみ存在する。」と記している。したがつて論理の混亂をさけるためには、エーテル的實體とは即ち運動であると考えなければならぬ。事實バルザックはエーテル的實體を説明するのに、電気、光、熱等をもつてしており、バルザックはエーテル的實體を物質ではなくむしろエネルギー、或は運動そのものであると見なしていたのではないかと考えられる。したがつてバルザックの眼には一切の存在がエネルギーないしは運動として表象せられていたのであり、そして一切を運動に還元する思想、すなわちデYNAMISM（物力論）こそは、ランベールが到達した最後の思想であつたに相違ない。⁽¹¹⁾

ルイ・ランベールのデYNAMISMの根底には先ず、宇宙に遍在するエーテル的實體という考え方があつた。それは實體とは言ふものの實は運動そのものであつて、この實體がさまざまに分化し、その實體の數に應じて、或は物質となつたり、或は生物となつたりする。そして人間にあつては、このエネルギーは特に強力な性質を帯びて意志となる。この意志から一切の精神機能は發するのであり、したがつて人間の精神は宇宙のあらゆる存在と共通な實體に起因するものではあるが、併し、それは決して物質ではない。それはエネルギーの一形態であり、それ故に精神は閉された世界を形づくるのではなく、エネルギーである限りに於て他に力を及ぼしたり、物質の世界に滲透したりする。⁽¹²⁾ すなわち、ルイ・ランベールの思想は人間の精神を、或は人間の生命を宇宙の共通な流れのうちに位置せしめ、宇宙との絶えざる交流のうちに置くのである。そして人間と宇宙との結びつきの直接の契機を意志に置き、宇宙に遍在するエネルギーは、意志を通して絶えず人間の精神に働きかけ、同時に人間は意志を通じて宇宙の運動に参加するのである。⁽¹³⁾

こうして、神祕主義と唯物論を結合しようとするルイ・ランベールの知的探究の果には、世界全體を巨大な一つの運動とみなす、^物力論的な世界觀が見出されるのであるが、このような世界觀を導入する事によつてバルザックは一きよに二つの重要な問題を解決しようとしたに違いない。

(1) 精神をも含めて一切の存在を唯一つの共通な運動の變形とみなす事により、物質と精神、更に一般的に言えば宇宙そのものを連續したものと見なす事が可能になる。宇宙を連續した統一物とみなすこの思想はのちに一八四二年の「人間喜劇」總序文に於て、《*unite de composition*》⁽¹⁴⁾ という觀念に達し、「人間喜劇」制作の主要な指導概念の一つとなる。

(2) 一切を運動とみなす観点から、その運動の窮極の原因を神に歸する汎神論的ディナミスムまでは一步の逕庭あるのみであり、そう考へるならば、第二期の「意志の哲學」と第一期の神祕主義とはたくみに結合される事になる。

併しながら、このようなバルザックの企圖は結局、結果から見ると、失敗に終つたと言わざるを得ないのである。もつとも重要であるべきルイ・ランベールの最後の思想を斷片の形でしか示す事が出来ず、思想を充分に展開させて作品のうちに劇化することを放棄したという事實がすでにその失敗を歴然たらしめているのだ。のみならず、ルイ・ランベールの哲學には、運動が如何にして物質に變化し得るかと言うもつとも重要な問題が曖昧なままに残されており、その點が明らかにされない限り、それは結局、世界についての充分な説明を興える事が出来ないのだ。そして「ルイ・ランベール」のこうした根本的な失敗は、バルザック自身がよく知るところであつた。「異國の女」への彼の書簡は、彼の惨めな敗北を告げている。

「私はあなたに《ルイ・ランベール》を自慢したことを後悔しています。それはあらゆる出来損いの中でも最もひどいものです。」⁽¹⁵⁾

さて、以上に述べたようにバルザックは自らのうちに矛盾として存在する唯物論と神祕主義を綜合しようとする意圖をもつて「ルイ・ランベール」を創作し、ルイ・ランベールを最後にディナミスムに到達せしめることによつて、統一的な世界觀を自己のものにしようとしながら、ついに失敗に終らざるを得なかつたのであるが、「ルイ・ランベール」は作者バルザックにとつて更にもう一つの重要な意味を有していた。それは即ち、ルイ・ランベールの精神の態度、ルイ・ランベールという人物のうちに表現された知的探究の方法そのものに外ならない。次に、ルイ・ランベールの精神を、それが抱懷する思想の内容という觀念からではなく、その精神のあり方そのものという観点から検討してみたい。

ルイ・ランベールの精神とは、何よりも先ず、宇宙と事物に關する絶對的な認識を追い求める精神であり、ルイ・ランベールとは一人の認識の魔である。彼は一切のものを根源に於て認識し、宇宙の核心にふれようとするいやされる事なき欲望につかれているのであつて、アリストテレスがかつて萬人のうちに認めた「知ることの欲望」はランベールに於て極限にまで高められている。そのために彼は、自己の知性を出來得る限り純粹なものにし、一切の行爲を「知る」という單一な行爲に還元しようとするのである。このようなランベールの精神は、われわれにヴァレリーの創造したテスト氏を想起させる⁽¹⁶⁾。テスト氏も又、純粹知性を求めて、自己の精神を正確さの極限にまでいたらしめようとし、テスト氏の外的生活は、殆んど知性のもつ抽象性と無限定性を帯びる。ヴァレリーのテスト氏が何よりも追求したのは「可能性の極限」という事であつた。即ち自我を偶然的なもの、不純なものから一切ときはなち、自己を全く抽象的なものにする事によつて、何物によつてもとらわれる事なき自由なものと化そうとしたのである。そうする事によつて、自我を一切に對して可能な状態、一切の限定性から脱したポテンシャルな状態におこうとしたのであつた。併し、このような企圖に對しては、(1) 一方では肉體が、(2) 他方では外界が不可避な障害として現れて來ざるを得ない。何故なら、精神が自由に羽ばたこうとすればするほど、そして可能性の極限を志向すればするほど、肉體は否定し難い一つの限界として、偶然性の化身として精神をおびやかさざるを得ないからである。何人も自己の肉體が、自由意志の及ばない、偶然性にゆだねられた存在である事を否定する譯には行かない。ヴァレリーに於て肉體の問題があれほどの重要性を有しているのはそのためであり、肉體の問題の重要性は知性を純粹化せんとする意志の強度に正確に比例しているときえ言える。ルイ・ランベールにとつても事情は全く同じである。彼の如き人間にあつては精神と肉體との分裂は必至であり、兩者の對立は可能性と限界性、必然性と偶然性の對立そのものである。かくて、純粹知性を求めるルイ・ランベールの努力は如何にして肉體から脱出するかという問題に歸着し、ルイ・ランベールの探究は、ある意味で自己の肉體との闘争の様相を呈する。併し、このような肉體と精神との分裂・抗争が肉體をも精神をもやがて破壊に導くのは當然であらう。精神が肉體から自由であらうとする時、肉體は精神に復讐する。ルイ・ランベールが狂氣に至る直接の原因が、戀人ポーリーヌの肉體が彼に及ぼした衝撃にあつたという事實がそれを雄辯に語つていよう。

肉體から自由であらうとしたのと同じ理由によつて、ランベールは又外界からも自由であらうとする。彼は「われわれを取りまく事物から完全に超脱して」⁽¹⁷⁾生きるのである。そしてランベールの眼は、ひたすら自己の内部に向い、そこに「思考の發生に關する記述し難い諸現象」⁽¹⁸⁾を探究しようとする。そこに見られるものはテスト氏の場合と同じく自我≡自我の孤獨な世界なのであるが、その場合にも自我は肉體によつて復讐されたと同じく外界によつて復讐されざるを得ない。ヴァンドーム中學を去つて以來、ルイ・ランベールは社會生活に適應し得ぬ人間となるのであり、外界への適應が完全に不能となる時、彼は狂人たらざるを得ないのだ。もともと知性を純粹化しようとするテスト氏の意圖は不條理極りないものである。あらゆる限定を拒絶し、自由の極致に於て一切が可能となる時、精神は何事をもなし得るが同時に何事をもなし得ない。可能性の極限と云うことは不可能性の極限と云うことであり、その時、精神は完全なる必然性を確保する如く見えて、實は偶然性にゆだねられてしまふのである。何故なら、何事をもなし得る以上、何事かをなすという事は偶然によつてしか決定されようがないのだから。それ故にこそ、ヴァレリーは「何故にテスト氏は存在し得ないか」⁽¹⁹⁾と問うたのである。われわれも又、ヴァレリーにならつて「何故ルイ・ランベールは存在し得ないか」と問う事が出来ようし、テスト氏と同じく、ルイ・ランベールも、ある時期のバルザックの想念が生んだ現實には存在し得ない怪物なのである。

ところで、ルイ・ランベールを以上に述べた如き認識の魔たらしめたものは何であらうか。認識に於ける絶對を追求するルイ・ランベールの精神の根底にある衝動とは何であらうか。ルイ・ランベールの精神について考えをめぐらす時このような疑問が生じてくるのはむしろ自然なのであるが、このような疑問に一般的な答を興える事は困難である。何故なら、それは一般に「何故われわれは知る事を欲するか」という問題につながるからである。けれども、ルイ・ランベールの精神を十九世紀フランス文學にかなり一般的であつた、ある種の精神の型と結びつけて考える事は可能である。バルザックを比較文學的見地から研究したバルダンスペルジェが詳しく述べているように、⁽²⁰⁾「ルイ・ランベール」の創作意圖の一つはゲーテの「ファウスト」に對抗しようという事にあつた。ゲーテの創造したファウストは、宇宙の神祕を測らうとしての遍歴の後、人間の努力の空しさに思いいたり、惡魔に魂を賣り渡す事により至高の快樂

を求めようとするのである。そこに見られるものは超人への欲求であり、自己の可能性の極限に至つて、人間の條件を超えようとする欲求である。ファウスト的精神とは（恐らく様々な解釋が可能であろうが）、知的優越の意識であり、自己中心的な倨傲の精神である。それは恐らく廣義に於けるロマン的精神そのものに外ならない。ファウスト的な絶対への希求を、自己の可能性の極限を求めめる精神を、われわれはリラダンの描くアクセル伯やスナンクールのオーベルマンのうちにも認める事が出来る。またファウスト的な運命への反抗を、ヴィニイの晩年の詩篇や、ロートレアモンの創造したマルドロールのうちに認めるであろう。そしてバルザックのルイ・ランベールこそは、知的側面に於て形象化されたファウストの精神そのものに外ならないのだ。ルイ・ランベールの知的探究は、限定された人間の條件への反抗であつたし、認識の魔ルイ・ランベールの背後には、宇宙の原因と結果を把握する事に於て超人たろうとする意志、權力への意志が明瞭に看取されるのである。

ところで、一八三〇年代のバルザックは、「ルイ・ランベール」以外にも、右に述べた如き意味に於てファウスト的な、絶対を探究する人々を主人公としていくつかの作品を書いている。すなわち、「知られざる傑作」（一八三二）、「絶対の探究」（一八三四）、「ガンバラ」（一八三七）がそれである。

「知られざる傑作」の主人公の老畫家、フレンホオフェルは十年以來、裸體婦人像にとりくんでいるが、彼はその繪を誰にも見せようとしなない。その繪は完成されれば、至高の美を表現している筈なのだが、それを完成するためには完璧の美を具えた婦人をたとえ一瞬間でも實際に見る必要があつた。彼は青年時代のプーサンから、その裸像を見せることを條件にして、彼の戀人をモデルにする許可を得る。ついに、プーサンがフレンホオフェルの秘藏の繪を見る時が来る。老畫家がその前で恍惚としている彼の傑作を見ると、それは單にごちやごちやに描きこまれた線と色の混合に過ぎず、ただ畫布の端の方に、神々しいまでに美しい婦人の足が見えているだけであつた。フレンホオフェルは美に於ける絶対を求め、ついに美の表現手段そのものを破壊してしまつたのである。絶対美を求めめる彼の觀念と、作品という具體的で明瞭に限定された現實とが分裂してしまい、その分裂に氣がつかないフレンホオフェルはもはや狂人です。

かないのだ。

「絶対の探究」は化學の情熱につかれたバルタザール・クラエという男の話である。ダイヤモンドを合成するための物質を發見しようとして巨大な努力をかたむける彼は、家族を破滅させ、自らも貧困のうちに死んでしまう。

「ガンバラ」は純粹觀念を音樂によつて表現し、音樂の本質を極限にまで押しすめようとする音樂家を主人公とする小説である。觀念を音樂化したと稱する彼の音樂は人々には混亂した雑音としか聞えず、まれにみる才能を持ちながら、彼は落魄した街頭音樂師として生涯を終るのである。

右にあげた作品の主人公はいずれも「絶対」への執念につかれた人々であり、自己の能力と方法の限界に比してあまりに廣大な夢にとりつかれたが故に破滅せざるを得なかつた人々である。彼らはすべて夢と現實を分つ巨大な深淵のうちにみずから身を投じたのであつて、その意味で彼らは、夢をもつて生きるに足る唯一の人生と見なす事をはばからなかつた詩人、ジェラルド・ドゥ・ネルヴァルを思わせるのである。また、フレンホーフエルとガンバラとは、藝術に於ける絶対的な觀念の表現をめざした點に於て、詩によつて事物ではなく、觀念それ自體を喚起しようとし、そうする事によつて宇宙の神祕を解き明かそうとしたマラルメを思わせるのである。フレンホーフエルの繪畫が、またガンバラの音樂がそうであつた如く、マラルメの詩にあつては、あまりにも壯大な藝術家の觀念が表現の手段たる言語そのものを破壊しようとしている。しかも、その破壊の寸前に於て、マラルメの難解極りなき詩句が生れたのである。だからマラルメ的詩句の難解さと、ガンバラやフレンホーフエルの作品の無意味さとの間には無限の距離が横たわつてると同時に、又極めてわずかな相違があるだけだとも言えよう。マラルメの苦しんだ不毛は、彼が、フレンホーフエルやガンバラの如き、完全な表現不能の状態の直前にいたことを示している。

さて、後になつて、ネルヴァルやマラルメが生きるであろうこのような夢と絶対につかれた妄想の人々の人生を、何故バルザックは描いたのか。答えは恐らく極めて單純なものでしかあり得ない。つまり、バルザックはそのように妄想につかれた人を己れの内部に持つていたのだ。バルザック自身、絶対への衝動と、認識の完璧への希求によつて苦しめられたからこそ、ルイ・ランベールの如き人物

を情熱をこめて描き得たのだ。狂氣に至るルイ・ランベールの悲惨な人生は、バルザック自身生きたかも知れない人生であつた。そして狂氣への恐怖は「幻を見る人」バルザックの内心に常に存在していたように思われるのである。例えば、「ファキノ・カネ」と題する作品の有名な次の如き一節は、少なくともそのようなバルザックの恐怖をわれわれに豫感せしめるに充分なものを持つてはいまいか。そこで、バルザックは「目覺めつつ夢見」、他人の人生を生きたという自分の能力について語りこつて記している。

「精神的能力の酩酊によつて自己以外のものとなり、しかもこれを思うがままに意志の力で行うこと、これが私の快樂であつた。私はこの能力を何に負つているのか。これは第二の視力であろうか。それを濫用すれば狂氣に至るような、そういう能力の一つであろうか。」⁽²¹⁾

「絶對」へ至る道をどこまでも歩んで行く時、藝術家はやがて狂氣となるか、或は表現不能の状態におち入らざるを得ない、ということバルザックは恐らく豫感していたのであり、ルイ・ランベールやクレンホーフエルを描いたバルザックは、あり得たかも知れない自己の悲劇を作品として對象化する事によつて、そのような自己からの脱出をはかつたのである。彼はマラルメの不毛に對して小説家としての豊かさを選んだのである。

以上を結論して言えば、「ルイ・ランベール」は二重の意味に於て青年期のバルザックの内的精神にかかりあい、又「ルイ・ランベール」の制作は二重の意味で、「人間喜劇」の作者としての道を歩み始めようとしていた一八三〇年代のバルザックにとつて必然的なものであつた。即ち、第一に唯物論と神祕主義を綜合し、統一的な世界觀に達するための實驗として、第二に自己の内に存在する「認識の魔」を作品のうちに對象化し、そうすることによつてデーモンの魔力から逃れるための手段として。

註

- (1) 「ルイ・ランベール」は一八三二年六月に書き始められ、同年《Notice biographique sur Louis Lambert.》なる題のもとに、ゴスラン書店刊行の《Nouveaux contes philosophiques》に收められた。以後、一八三六年一月刊行の「神祕の書」二版に至る

まで、たびたび大幅な加筆が行われ、この作品の制作期間は事實上一八三二年より三五年に及ぶと言える。

(2) cf. Proult : *Balzac avant la Comédie humaine* p. 3~p. 89.

(3) *Sténie*. Lib. Courville (1936) p. 73

(4) 「ファルチュルヌ」セラフィータ」はカステックスの推定によると一八二三年の作品である。この作品はいまひとつのファルチュルヌ、つまり「ファルチュルヌ」サヴァナッチ」と區別される必要がある。普通に「ファルチュルヌ」と言つた場合には後者を^{4) 10}。

(5) *Correspondances avec Zulma Carrand*. 25 janvier 1833.

(6) *ibid.* 16 décembre 1832.

(7) *Louis Lambert*, édition critique établie par M. Bonteron et J. Pomnier. (1954) p. 118.

(8) *ibid.* p. 94

(9) *ibid.* p. 107

(10) 断片は二つのグループに分れている。最初のグループは22の断片からなり、後のものは15の断片からなつている。ここでは便宜上、両グループを合せて数える事にした。したがつてより正確にテクストに従うなら、23番の断片は第二グループの1番の断片と言ふべきである。

(11) このようなダイナミックな考え方はバルザックの社會思想にも照應している。B. Guyon : *Pensée politique et sociale de Balzac*. (1947. A. Colin) によると、バルザックは社會全體を人間のエネルギーの總和と考えていたという。また、ルイ・ランペールのダイナミズムについてはエヴァンズが簡単な指示を與えている。(Louis Lambert et la philosophie de Balzac. p. 234)

(12) このような觀念が、知覺の問題については、サンマルタンやホフマンにすでに見出されるとともに、ボードレールがその詩學の一部とするところの共感覺(synesthésie)の理論を生ぜしめる事は當然である。バルザックは断片7に《……ainsi les quatre expressions de la matière par rapport à l'homme, le son, la couleur, le parfum et la forme, ont une même origine.》と記している。ルイ・ランペールの哲學によれば、精神は宇宙のエネルギーの一變形なのであるから、知覺とは要するにこの精神に變形されたエネルギーが再び他のエネルギーに出會うことに外ならない。したがつて香・音・色等を知覺することはすべて共通な、同一の機能に歸着してしまい、視覺、聽覺、觸覺などは互に置きかえ可能な感覺とみなされるのである。恐らく synesthésie は、

藝術家がとらえた美意識上の感覺である以上に、當時の全般的な哲學と科學の大きな傾向に根ざした理論だったのでなからうか。一九世紀に於てはかななり一般的だつた單一字宙論的な、又物力論的な考え方を考慮に入れる事なしには、*synthésie* を理解する事は出来ないように思われる。

- (13) エネルギーとしての主體的精神は存在事物との絶えざる交流のうちにあるとするこのような思想は、「人間喜劇」の想像的世界の内部構造をも規定している。この問題は「ルイ・ランベール」の埒外にあるので詳しくふれる事は出来ないが、「哲學研究」の諸作品に於ける主體と客體的存在事物との關係、言い換えれば、小説の人物とその環境との關係を検討する時、ルイ・ランベールの哲學はいわば美的現實として實現されている事が理解されるのである。つまり「哲學研究」におきめられた小説の人物たちは、外的な事物や、自然によつてしばしば激しい影響をうけ、時として對象のうちに同一化してしまうのである。彼らの精神も又、閉された世界ではなく、開かれた世界であり、容易に宇宙の普遍的な運動のうちに身をゆだねてしまうのである。一例をあげよう。

「素晴らしい九天井とアラバスクを……みつめてみると、私の知覺は混亂した。私は視覺の眞にとらえられ、多様な様相によつて殆んど眩惑され、現實と幻想との境にいるようであつた。」(Jesus-Christ en Flandre. La Comédie humaine X. p. 261 *pléiade*)
「こうして自然それ自體が、生死の境にいた彼を苦惱にみちた恍惚のうちにひき入れる事に協力していた。彼はあの有聲な魔力にとらえられていたのだ。その魔力の分解的な作用は、われわれの神經の中を流れている流體をかつこうな媒體としてしまうのである。彼は彼の體が知らず知らずのうちに流體に固有な現象を呈して來るのを感じていた。この斷末魔の苦しみのために、彼の體は波の運動に以たある種の運動を始め、建物や人間たちは、霧を通して見るように感ぜられた。そしてその霧の中ではすべてが波動していた。彼は物理的な自然が彼に與えたくすぐつたような快感からぬけ出そうと望んだ。」(Peau de chagrin. Com. hum. IX. p. 22 *pléiade*)

このように人物と對象との關係は單なる認識作用あるいは知覺作用ではなく、しばしばそれ以上のもの、ルイ・ランベール風には、エーテル的實體の交流の感呈しているのである。

- (14) この《*unité de composition*》という觀念は勿論、多くの研究家が指摘しているように、Geoffroy Saint-Hilaire 等の當時の思想家の影響下に生れたものである。のみならず、宇宙をダイナミックな單一物と見なす思想それ自體、一九世紀前半のフランス思想の大きな流れの一つであつた。エミール・ブレイエはその著名な哲學史の中で、一九世紀前半のフランス哲學の主要傾向の一つ

として、單一宇宙論的な自然哲學と、アトミズムやメカニズムに類するものとしてのチャタリズムを区別する。(E. Bréhier:

Histoire de la philosophie, tome II, 3 p. 576. P. U. F. 1948)

- (5) Evans : Louis Lambert et la philosophie de Balzac. の十七頁に引用されている。
- (6) Evans の前掲書でルイ・ランセルをラスタト氏に比している。(ibid. p. 8)
- (7) Louis Lambert, édition critique, p. 63
- (8) ibid. p. 65
- (9) P. Valéry : Monsieur Teste p. 11. N. R. F.
- (10) Baldensperger : Orientations étrangères chez H. de Balzac (1927). pp. 193~8.
- (11) Facino Cane. Com. hum. VI p. 67. pléiade.